鴎外の非

科学研究は、過去の事象の観察や実験結果を最もよく説明する法則（仮説）を考え（帰納法）、これをもとに、これから起きてくる事象を予測し、あるいは、ある行動がどんな結果をまねくか、予測する（演繹法）いとなみだ（こう書けば、理性や知性というものと科学はほとんど同一のものになる）。法則（仮説）は予測-結果によってそのたびに検証されて、間違ったものは捨てられ、あるいは修正され、予測に成功した法則（仮説）は確固さを増してゆく。その過程で、科学者の間にいろいろ論争もあるのだが、結局、論争は事実によって一つの決着がついてゆく。

しかし、決着を認めずにあくまで自説を主張し続ける科学者もいる。たしかに、決着と言っても厳密には最終的なものではなく暫定的なものであり、後に違った決着になることもあるから、それはそれでいい。しかし、科学によって行政が左右される局面では、科学者があきらかな事実の承認を拒み、時に結果を工作し、詭弁や政治的な策動で論争相手を攻撃し、間違った自説を延命させ、一般社会にも大きな被害を及ぼすことがある。

危険性が実証されつつあった非加熱血液製剤の使用を認めて結果として血友病患者に多数のエイズ感染者を生じさせた安倍英教授（帝京大学）、水俣病の原因は有機アミンであり漁民が腐りかけた魚を食べたせいだとまったく根拠のない主張をマスコミも利用して宣伝して水俣病の認定を何年も遅らせた清浦雷作教授（東京工業大学）などの例がある。また、既に伝染性が弱いことが分かっていたのにハンセン病の強制隔離と断種の継続を決めた1953年の「らい予防法」制定の背後にいた医学者たちをあげてもいいだろう。近くは、原子力発電所の絶対安全性を電力会社の求めに応じて保証し、事故の危険性や対応の検討を言う少数の学者を奇人扱いにして嘲笑し冷遇した原子力工学の大学教授達（事故が起きたら「想定外」と言って自己免罪）もその列に入るだろう。

しかし、日本史上、空前絶後の大きな災厄を引き起こした科学行政事故は、日清日露戦争における陸軍内の脚気の蔓延と犠牲である。その責任は陸軍軍医局の中心にいた森林太郎と彼の上司の石黒忠のりにある(注1、注2)。私はビタミン（補酵素）の講義の準備の際に、日露戦争において日本陸軍がビタミンB1欠乏による脚気で悩んだことを初めて知った（注3）。当時の講義メモをめくりつつ、資料（坂内正「鴎外最大の悲劇」新潮選書　2001年、他）を参照し、やや詳しく述べる。

脚気は、今ではビタミンB1の欠乏による病気であるとわかっているが、明治初期には原因のわからない病気で広く蔓延していた。皇女和宮は脚気で死亡し、明治天皇と皇妃も脚気に悩まされていた。兵舎の陸軍兵士、艦艇の海軍の兵士は、常時およそ3割が脚気に罹患しており、毎年約1%の兵員が脚気で死んでいた。

明治15年10月から9カ月をかけて太平洋を練習航海した軍艦「龍驤」（りゅうじょう）では、またもや脚気は惨憺たる被害をもたらした。航海中に乗員378名中169名（46%）が脚気になり、23名（~15%）が死亡した。要員不足で将校までが機関の釜たきをせざるを得ない状況だったという。これではとても海戦などできたものではない。

英国で疫学を学んで帰国していた海軍軍医の高木兼寛は、英国には脚気患者がいない、日本艦艇が寄港して兵士が雑食すると脚気がなおる、将校に少なく兵卒に多い（両者は食事が

違う）ことなどから、脚気の原因は過剰な白米食にあり、と考えた。それまでの兵食は白米たっぷり（1日6合、約1キロ！）にわずかな副食というものだったのである。以後の文中で、白米食と呼ぶのはそういった食事のことを指す。

明治17年、高木兼寛は、兵食を洋食（パン中心）に改めて、軍艦「筑波」を「龍驤」と同じ航路、同じ条件で航海させた。その結果は、乗員333名中脚気の発生はわずか16名（そのうち12名は洋食拒否者など）死者ゼロという劇的なものだった。なんと見事な科学的な対照実験だったろう！　ここに海軍の脚気対策は早くも確立し、兵食を白米食からパンや麦飯（米6麦4）に代えて副食を増やし、以後、脚気に悩まされることはなかった。後のロシアのバルチック艦隊との日本海海戦の勝利もこの兵食改善があったればこそ、と言ってもいいだろう。

陸軍の方も大阪の部隊の軍医が、脚気が猖獗をきわめていた監獄で白米食を麦飯に替えたとたんに脚気がほとんど消滅したことを聞きつけて、さらに調査の末、麦飯を採用し、脚気の撲滅に成功した。

明治20年には、東京の近衛連隊では、一連隊（~1400人）には従来の白米食、もう一連隊には麦飯を与えたところ、白米食者の~60人は脚気になったが、麦飯者の脚気はゼロ、という結果となった。この実験は明治天皇も視察し、麦飯食によって帝の脚気はほとんど軽快した。これらが知れ渡り、陸軍の各地の部隊も麦飯を採用するようになって、明治17年には総員の28％を占めた陸軍の脚気患者が明治24年には0.5％に激減した。

こうして日本軍は麦食によって脚気問題を事実上解決したのであるが、ところが、陸軍において大変などんでん返しが始まった。

明治17年、「筑波」が太平洋を航海しているころ、陸軍の軍医の森林太郎はドイツに留学した。彼は上司の石黒軍医監から、特に兵食について研究せよ、と指示されていた。石黒は、脚気は細菌の感染症だ、と信じており、海軍の高木の洋食や麦飯による脚気予防に強く反対していた。当然、石黒がドイツの森林太郎に期待したのは、高木に反論する論拠を作成することだった。

林太郎は期待に応えて「兵食論大意」を著して日本に送り、白米食を擁護し麦飯論を退けた（注4）。林太郎は、高木が「米食は洋食（麦飯）よりも栄養的に劣っている何かがある、それはタンパク質と糖分の割合だろうか」と議論しているところに目をつけて、米食の栄養（カロリー）は洋食に劣らないかそれ以上である、と反論する。麦飯で脚気が防げるかどうか、が肝心な争点であり、これは争点のはぐらかしである。また、同論文のドイツ版では、上記の近衛連隊の実験を「失敗」と偽って記述している。

明治21年、帰朝した林太郎は例の舞姫問題が片付くや「非日本食論者はまさにその根拠を失わんとす」と題して講演し、海軍の高木兼寛を「ローストビーフに飽くを知らざるイギリス流の偏屈学者」と罵しった。

明治22年、森林太郎は陸軍兵士数名をそれぞれ洋食、麦飯、米食を与え、8日間同一の勤務をさせて、その間、食餌と排せつ物の栄養分などを測定するという実験を行った。そして、カロリー摂取の効率で評価すると、米食が最良、次に麦飯、最後に洋食、と結論した。脚気になるかならないか、にまったく無関係なこの実験の結果は、しかし、白米中心の陸軍兵食を裏付け、麦飯を排除する金科玉条の科学的証拠として林太郎によってその後２０年も使

われることになる。

明治27年、日清戦争が始まった。陸軍派遣部隊は、森林太郎と石黒軍医監の強引な主張により白米食を支給された。結果は惨憺たるものだった。後年の陸軍の公式記録でも「古今東西の戦役記録中ほとんどその例を見ざる」惨状と記す。

とにかく、戦闘による死者977人に対して、脚気による死者4,064人、入院患者は「銃砲創（傷）1につき（脚気は）実に11.23の多数を占め」たのである。林太郎は第2軍兵站軍医部長として現地で活動するのだが、奇妙なことに、林太郎の報告書では彼の関係する兵站病院について脚気患者発生の記載がほとんどない。目の前の事実も認めないのである。

明治28年、日清戦争は日本勝利に終わった。清は台湾を日本に割譲したが、台湾ではまだ騒動が続いていたので、日本軍が派遣された。その派遣軍の軍医監が林太郎だった。兵食は例によって白米食、すると平均兵員総数23,338人のうち脚気患者数21,087、脚気による死者2,104人、実に兵員の90％（別の統計では107％！）が脚気に倒れ、9％が脚気によって死亡したのである。林太郎は在任5カ月で台湾を去ったが、後任として台湾に着任した軍医部長は、帰京した林太郎らの妨害（「供給に妨げなき」かぎり米食を行うべし、と通達している）を無視して、兵食を麦飯に変換し、脚気発生は10分の1以下に激減した。この軍医部長は、解任されて帰京した途端に出勤に及ばずとして休職に処された。

明治29年、この台湾での惨事はさすがに問題となり、批判が続いた。その中で、清から割譲された澎湖島派遣の陸軍と同一地で勤務する海軍水雷隊の比較の報告があった。同じ島で、同じ居住地で、被服、寝具、勤務も大差ない。違うのは陸軍は米食、海軍は麦飯、ということだけだった。結果は、陸軍兵士の80％が脚気となり、海軍の脚気はゼロだった。

明治33年、林太郎は「脚気減少は果たして麦をもって米に代えたるに因するか」という論文を発表して「（麦食論は）論理上誤謬を有して、根拠すこぶる薄弱なること、かくのごとし」と断ずる（注5）。

明治37年、日露戦争が始まった。林太郎は第2軍の軍医部長を命じられ、戦地におもむく。陸軍医務局には、戦地の兵食を麦食を、という具申がとどくが、林太郎らはこれを一蹴、白米食を兵士に与える。その結果、脚気惨禍は日清戦争をはるかにうわまわった。

陸軍は、出征兵士約100万人、傷病者35万人、うち脚気患者25万人（25％）、全死者3.7万人、うち脚気による死者2.8万人（2.8％）（注6）。戦闘による死者よりも脚気による死者の方が多い。日本兵は、ロシア兵に殺されるよりも森に殺されたほうが多かった、と言われたのもあながち中傷ではない。

海軍は、出征兵士約3.8万人、傷病者約3700人、うち脚気患者87人（0.2％）、脚気による死者3人（0.008％）。海軍は海軍陸戦隊1400名を二〇三高地攻撃に派出し陸軍とともに戦ったが、脚気患者は1人もでなかった。

明治38年、それでも陸軍軍医局は動こうとしないので、ついに寺内陸軍大臣が軍医局の頭越しに「出征部隊麦飯喫食の訓令」を発し、以後脚気は漸減してゆく。

また、国会で森林太郎らに組しない医学者の議員の発議で「学識者を集め脚気病調査会を起こす」ことが議決された。当然、論戦の続く脚気麦飯予防論を決着させることを期待してのことだった。

明治40年、このようなことがあっても、森林太郎は陸軍軍医の最高位である総監に昇進

し、同時に陸軍医務局長に就任した。両職兼任は陸軍始まって以来だった（注7）。

明治41年、寺内陸軍大臣に叱咤されてようやく臨時脚気病調査会が陸軍の管轄下に発足した。会長は森林太郎であった。

明治天皇は「軍隊の脚気病は麦飯を用いて確実に予防の功を挙げた。この上なお調査会を設けて原因を研究する必要があるのか」と述べたという。

寺内陸軍大臣は第一回の会の冒頭、「自分は長い間、脚気患者だったが20年前に麦飯によって脚気から解放された。日清戦争時にはわが軍に麦飯を給したが、そこにいる森局長は石黒とともになぜに麦飯かと自分を詰問し、ついに麦飯を中止した」ということを述べた。

しかし、第二回会合で森会長は調査の方向として、一、微生物学、二、医化学、三、病理学、四、臨床医学、五、流行医学、をあげた。肝心の米や麦にかかわる栄養面の調査は排除されていた。

明治43年、志賀潔らは、ニワトリおよびハトを白米食で飼うと脚気のような症状で死ぬこと、これに米ぬかを与えると回復することを見出した。白米には何か栄養素がたりないこと、その栄養素は米ぬかに含まれていることを示す大事な発見である。しかし、米食派は、トリとヒトは違う、と一蹴。

大正2年、森林太郎は著書（衛生新篇第5版）において、なおも脚気を疫種（伝染病）として記述する。

大正13年、この調査会は多大の費用と16年の歳月をかけて、やっと脚気白米食原因を認め、ビタミン不足で脚気になることを認めた。森林太郎は大正12年に亡くなっているが、最後まで、自分の誤りを認めず謝罪もしなかった（注8）。

おわりに

森林太郎は戦場の病院で、脚気で苦しみ衰弱し死んでゆく兵士を毎日のようにま近で見ていたはずである。なんとか助けられないか、と思わなかったのだろうか。医師であればなおさらに、治療のすべはないか、と必死になるはずである。すべは身近にある、麦飯である。この特効薬を与えれば重症の脚気でも著効があり回復する。それを知りながら、彼は兵士が脚気で死ぬにまかせ、自分のメンツを優先し、みて見ぬふりをした。それどころか、別の病で死んだように隠ぺいする。

私は、森林太郎この残酷で異常な感覚に驚きと憤りを感じていたので、この一文を記した。

付論・・・鴎外の文学

医学者森林太郎と文学者森鴎外は同一人物である。鴎外は有名である。崇拝者も多い。しかし、医学者としての林太郎は述べてきたようにひどいものである。自然科学では、法則は、誰が発見しても同じである。人格と法則は関係がない。では、文学では作者と作品はどういう関係にあるのか。シェークスピアを知らなくても「マクベス」は面白い。一葉を知らなくても「たけくらべ」の情感は印象に残るだろう。藤村を知らなくても「破戒」の提起するものは考えさせる。では、林太郎が鴎外として著した作品はどうだろうか。私は、彼の膨大な著作の一部を読んだに過ぎないし、系統的な批評家でもないが、その限りで感想を述べてみる。

鴎外の文学は講談である。漢籍を駆使し非常に語り口がうまい。「山椒大夫」や「高瀬舟」「堺事件」、など講釈師が語ったらいいと思う（軍扇片手の張り三味線、と評した人がいる）。しかし結局、人の強さを褒め、外れたところが

なく、説話風の美談調であり（丸谷才一の評に同感）、内省的あるいは批判的なところがない。鴎外は江戸期の浄瑠璃や典籍、故事をよく渉猟しており、その中から彼がその時々に興味をいだいたものを拾ってきている。したがってテーマに一貫性がない（松本清張の評に同感）。こういうのをすばらしい文学とする日本の風潮は、芥川龍之介の「杜子春」「芋粥」、太宰治の「走れメロス」などに引き継がれた。

鴎外の文学は腹いせや攻撃である。小説「舞姫」は、ドイツから彼と結婚する約束でやってきたエリーゼを追い返しお仕着せの結婚を強要した母や縁戚（「家」の因習）、陸軍上司（栄達の条件）にたいする腹いせ、押し付けられた妻に対するいやがらせ、と私は感じる。鴎外は、家族をよび集めて、彼の弟に命じて「舞姫」を読み聞かせている。お仕着せ結婚の妻が出産したその直後に、彼は家を出て別居を始めて、1年後には離婚している。すると、鴎外の母はつぐないのように彼に妾を世話して別居宅の近くに住まわせている。

最近の調査（六草いちか、他）を見て思うに、エリーゼは、将来を嘱望される洋行官僚、林太郎ではなく、人間としての林太郎を愛したのだろう。林太郎も一人のやさしい女性としてエリーゼを愛した。しかし、帰国するや周囲の圧力に直面して悩み、結局エリート官僚になるためにエリーゼをうらぎる選択をする。林太郎はここで最初にして最後の処世の選択をした。

愛と因習について考えるならば、「舞姫」の物語は、むりやり舞姫を発狂させてドイツで終わらせるのではなく、日本帰国後の葛藤と顛末を描くべきだったと思う。結局、「舞姫」は、鴎外の始末（ゴシップ記事）として面白いが、真剣な文学にはならなかった。

「半日」では嫁姑の争いを書く。妻について、こんなひどい女はいるだろうか、まいったよ、と綿々とぐちる。現に一緒に住んでいる妻がこれを読むことを知ったうえで、書いたものだ。つまり妻を攻撃している。一方、姑、つまり自分の母親については一言も批判がない。彼に絶大な影響力をもった母親に対して、自分も妻には辟易しているのだ、という弁明にもなっている。文豪鴎外だから今でも読まれるが、彼以外の人間がこんなものを書いたら、とても後世にのこらないだろうと思う。文中で「おれは公證人を立てて、立派に遺言がしてあるから、お前（妻）や玉（子供）の困るやうな事はないのだ。」とあるが、これは真っ赤なウソ。死後、開封された遺言は「お前」には何もやらぬとあった。

鴎外の文学は自己弁護である。「妄想」では、海浜の小家に一人住む仙人のような主人が、自分の人生は誰かの書いた脚本通りに演じただけの役者ではないのか、などとあれこれ回顧してつぶやく。これをもって、多くの鴎外評論家は鴎外の複雑な内面を解説する。しかし、これはみるからに戯文であり、文体は軽く、真摯な表明ではない。自分のことを役者とみなしている者がいるかもしれないが、自分はそのことに気がついていないほど軽薄じゃない、と言っているようだ。しかし、林太郎は今まで、自分の演じている役割に真剣に悩んだことなどほとんどない（あるとすれば舞姫問題だけ）、と私は思う。いかに自分の役割をうまく演じるか、それに徹している。だからこそ、あれだけの失敗をしながら、軍医監にまで上り詰めたのではないか。

鴎外の文学は切腹にこだわる。幼いときに、武士はいざとなれば平然と切腹するのだ、と父から言われて、自分はできるだろうか、と後々まで自問しているようである。そこに、彼が畏敬する乃木希典の殉死切腹があって大衝撃を受ける。その衝撃で、「興津弥五右衛門の遺書」、「安倍一族」、「佐橋甚五郎」を書く。これも講談としては上出来と思うが、とにかく、

こうやって立派に腹を切るやつがいるのだ、すごい、という内容であって、私にはそれ以上の批判性はあまり感じられない。

鴎外の文学は衒学的（学のあるところの見せびらかし）である。これは、晩年の「伊沢蘭軒」「北条霞亭」できわまる。いったい、難解晦渋の漢語の羅列を何人の人が最後まで読んだのだろう。私は今回、試みたがとてもできなかった。鴎外全集でも本文よりも語釈解説のほうが大部である。鴎外はドイツ語と漢籍が大得意で、科学論文ではドイツ語を濫用し、作品では漢語をふりまわした。

鴎外は緊密硬質な文に優れた講談作家だった。江戸期の人気の講談（曽我物語、鉢の木、天保水滸伝など）の伝統をひきついでいるように見える。批判精神に欠けるとしても、鴎外の名を冠さなくても読ませる語りだと思う。

では文学者としてはどうか。幾つかの作品を読んだ限りの印象では、作品は作者鴎外から独立していない、と思う。鴎外の落款があってはじめて読まれるものが多いのではないか。

もし、「舞姫」「半日」「妄想」のような作品が明治期の無名人の作品としたら、今ほど多くの人に読まれただろうか。いや、すでに忘れられていたかもしれない。「文豪」鴎外の作品ということですでに加点されて読まれているのではないか。また、森鴎外の著作は、彼の人生の軌跡のあれこれの状況を知ったうえで読まれている。彼のその時々の弁明、腹いせ、攻撃、述懐、として、はじめて興味をもって読まれるのである。

注1

薬害エイズの場合は、非加熱血液製剤の回収を命じなかった厚生省の役人は、不作為による過失致死罪で有罪となり刑事罰を受けている。現在の司法ならば、森林太郎は麦飯を（不作為どころか）妨害し続けて脚気による膨大な死者を生み出したとして、有罪となると思う。万死に値するという人もいる（鹿島茂）。

注2

脚気を脚気菌による伝染病だろうと最初に（そして最後まで）主張したのは、東京帝大医学部の教授たちである。彼らはドイツの細菌学の隆盛を学び、それから脚気も病原菌があるに違いない、と信じこんだ。陸軍の石黒もこれに同調した。彼らはイギリスの疫学（集団を対象に活動と病気の関係をさぐる）をまったく理解しようとしなかった。

注3

日露戦争はビタミン戦争のようなものであった。堅固な旅順要塞に立てこもったロシア軍の兵士は150日の籠城のうちに兵士の90%がビタミンC欠乏症である壊血病に罹患した病人だった。かたや、これを包囲した日本陸軍の方も兵士の大半がビタミンB1欠乏症である脚気（カッケ）に悩まされたのである。両軍の兵士とも、欠乏症でふらふらしながら戦ったのである。

ちなみに、ビタミンB1はチアミンという化合物であり、体内でチアミン2リン酸となり、ブドウ糖から生じるピルビン酸をクレブス（TCA）回路に導くピルビン酸デヒドロゲナーゼの補酵素である。白米（デンプン）を摂ればとるほど必要となる。

注4

この論文でも、森林太郎の情報の恣意的な引用、数々のハッタリが目につく。「余は東西洋人民の食を知るものなり」と威張り、ライプチヒ大学では「食物に関する種々の試験を為したり」（実は原著論文になるような実験は一切やっていない）と虚言し、「欧州諸大家」の

名をもものしく列挙し、ドイツ語をやたらとちりばめる、など。

注5

この論文は、統計の恣意的な編集（日清戦争の脚気惨禍が消えている）、勝手な断定「海軍の如きも脚気消長の跡、（陸軍と同じく）明瞭ならず」、空とぼけ「米麦混食を取りし年と脚気暴減の年とはすこぶる妙に相符せり」、無理な論理「しかし（脚気と麦食の間の）関係を二者の間に求めるのは認められない」、暴論（伝染病は理由無く流行と沈静をくりかえす、脚気の消長もまたしかり、と論じる）で成り立っている。

注6.

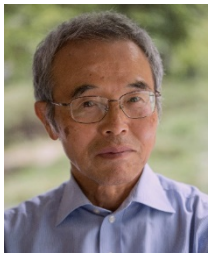
陸軍医務局は、脚気患者を他の病気としてカウントする、患者数を実数ではなく％で示し、その母数を戦後半年の動員兵士（脚気は麦飯によって激減している）まで含める、など数字を操作しているので、患者数はもっと多いという推定がある。また、林太郎は、乃木将軍の指揮下に203高地の攻撃に当たっていた部隊については、脚気統計から外している。

注7

山懸有朋と親しかったおかげか。日本陸軍では、こういうハッタリ屋で攻撃的で口の立つものが、いくら失敗しても、反省もなく、責任をとらない、はばをきかす、という伝統があると見えるが、このあたりがその嚆矢だろうか。

注8

大正6年、晩年の森林太郎は「私は医を学んで仕えた。しかし、かつて医として社会の問題に上ったことはない。」（「なかじきり」）と述べる。



吉田賢右